

聖書：使徒 26：1～23

説教題：暗やみから光に

日時：2014年9月28日

アグリッパ王の前におけるパウロの弁明です。パウロは 25 章 11 節でカイザルに上訴しました。そういう意味で彼の行き先はすでに決定しています。ですからこれ以上、カイザリヤで裁判をする必要はありません。しかし新総督フェストに挨拶をしに来たアグリッパ王が、パウロの話をぜひ聞いてみたいと希望したことによって、この場が設定されます。パウロはこれを伝道の機会としています。そういうものとしてパウロの言葉を見て行きたいと思ひますし、また私たちに語られている説教として見てまいりたいと思ひます。

まずパウロはアグリッパ王に「あなたの前で弁明できることを、幸いに存じます。」と述べ、「どうか、私の申し上げることを、忍耐をもってお聞きくださるよう、お願いいたします。」と前置きして、自分のかつての生活について述べます。パウロは若い時からエルサレムで過ごし、宗教の最も厳格な派に従って、パリサイ人として生活して来ました。そして神が父祖たちに約束されたものを待ち望んで歩いて来ました。ところがそのことで私は裁判を受けているのです、と彼は 6 節で言ひます。7 節でもこう言ひます。「私たちの 12 部族は、夜も昼も熱心に神に仕えながら、その約束のものを得たいと望んでおります。王よ。私は、この希望のためにユダヤ人から訴えられているのです。」パウロがここで主張していることは、彼が伝えているキリスト教福音は、イスラエル人が信じて来た信仰と一つにつながっているということです。キリスト教はユダヤ人の宗教と対立したり、これを否定するものではなく、むしろそこに根ざすものであり、その正統的な結論・成就であるということです。そこで 8 節でパウロは「神が死者をよみがえらせるということ、あなたがたは、なぜ信じがたいこととされるのでしょうか。」と言ひます。特にここで考えられているのはイエス・キリストの復活でしょう。神は約束に従って復活のみわざを行なうてくださったのに、いざそれが行なわれると、なぜそれを信じがたいこととするのかと問ひます。

そうは言ひつつも、パウロ自身もかつてはこれを信じがたいこととする側に立っていましたから、彼らの無理解はある意味で理解できます。そこで 9 節以降でかつての自分もそうであったことについて触れます。以前は彼もイエスの復活を信じられず、むしろナザレ人イエスの名に強硬に敵対すべきだと考えていました。彼はキリスト教会を迫害し、信者たちを牢にぶち込み、彼らが殺される時には賛成の票を投じました。また会堂を巡って信者たちを見つけ出しては罰し、御名を冒瀆する言葉を言わせようとし、また逃げて行く人々を国外まで追跡しました。なぜパウロは神の約束を待ち望みつつも、いざイエスの復

活が行なわれると、それを信じる者たちを迫害したのでしょうか。それはやはり、イエス様が十字架にかかって死なれたお方だったからでしょう。ユダヤ人はやがて来られるメシヤは、栄光に輝く誰からも称賛されるメシヤであって、その力強い御腕をもってローマ帝国を打ち倒し、ユダヤ人を高く上げてくれるお方だと思っていました。ところがイエス様は地上の最後に十字架にかけられ、呪われた者として死にました。最も惨めな方法で、神に見捨てられた者として死にました。あのどこがメシヤなのか！あれをメシヤだと拝むのは冒涇以外の何ものでもない！そんなことを主張する信者たちは根絶しなくては！と駆り立てられたのです。そのためにパウロは自分のあらゆる情熱とエネルギーを注ぎ込んだのです。

そんな彼に、人生全部がひっくり返される時がやって来ました。すなわち 12 節以降に記されているダマスコ途上における主の現れです。これは使徒の働きにおける 3 回目の記録です。パウロはダマスコに向かう途中、突然、天からの光に照らされます。時は正午ごろ、最も明るい時間に、太陽よりも明るく輝く光がパウロと同行者たちを照らし、みな地に倒れます。そして声がしました。「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。」パウロが「主よ。あなたはどなたですか。」と尋ねると、天からの声は言いました。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。」

もしこの言葉が本当なら、どういうことになるのでしょうか。それはまず死んだはずのイエスが生きている！ということです。つまりイエスの弟子たちの言っていたことの方が正しかった！そしてこの方が栄光の内におられるということは、神がこの方を承認し、高く上げておられるということです。ですから自分がこれまでやって来たことは全部間違いだったということになります。自分はこれまで神に仕えていると確信して来たのに、実は神の御心に全く反逆する働きに没頭して来たただけであった！14 節の「とげのついた棒をけるのは、あなたにとって痛いことだ」という言葉は、当時の人々には知られた表現で、神に無駄な反抗を企てることを指す言葉のようです。パウロのして来たことは、このようにすべてが的外れでした。彼は悔やんでも悔やみきれない間違った道を進んで来たのです。実に私たちもこのように歩み得るとということです。自分では正しいと思っていても、全く間違った道、恐ろしい罪を積み重ねる道を歩んでいるということがあり得るとということです。

しかしこのダマスコ途上の経験は、ただそのことが示されるだけの出来事ではありませんでした。本来このような自分は直ちに滅ぼされてもおかしくありません。ところが復活の主は、パウロがなお生き永らえることを良しとしたばかりか、彼に使命を与えられます。すなわち神の国のための働き人として用いるという御心をお示しになった。パウロがこの主イエスとの交わりの中で分かったことは、主の十字架はこのような救いようのない罪人

を救うための愛とあわれみのわざであったということです。主はこの私のような罪人を滅びから救い出すために、身代わりに十字架にかかってくださいました。そして払うべき値を完全に払い切ったお方としてののちに復活し、この祝福を全世界に広げるために、私を用いてくださるという。

そのパウロを遣わす目的が 18 節に記されています。まず「彼らの目を開いて」とあります。パウロの目も、今の今までつぶっている状態にありました。自分ほど良く目が開いている人はいないと自負していましたが、実は目をつぶった状態で神に逆らう歩みを一生懸命行っていた。また「暗やみから光に、サタン（Satan）の支配から神に立ち返らせ」とあります。パウロのこれまで大切なことが何も見えない闇の中で空を打つような歩みをして来たのです。これはサタンの支配下にあったということでもあります。最初（最初）の人間アダムとエバが神よりも悪魔の言葉を信じ、自ら悪魔の支配下に入って以来、生まれながらの人間はみなサタンの支配下にあると聖書は語っています。それによって一層光が見えない生活を送っていたのです。Ⅱコリント 4 章 4 節：「その場合、この世の神が不信者の思いをくらませて、神のかたちであるキリストの栄光にかかわる福音の光を輝かせないようにしているのです。」しかしキリストはこの暗やみから光に、サタンの支配から神の支配に私たちを導き入れてくださることができると。コロサイ 1 章 13 節：「神は、私たちを暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。」

そしてキリストが与えてくださる祝福が「罪の赦し」です。何と言ってもこの罪こそが、私たちに呪いと悲惨をもたらしているすべての原因です。この罪を持っている限り、私たちは霊的な暗やみの下にあり続け、またサタンの支配下にあり続け、自分と他人に災いをもたらし続けます。そして最後にその積もり積もった罪に対するさばきを神から受けなければなりません。しかしキリストを信じる信仰を通して、それまでに犯した一切の罪、神の御前で責任を問われる一切の罪を赦していただくことができる。そして御国を受け継ぐ者とさせていただくことができるのです。

この主の招きにパウロはどう応答したのでしょうか。19 節でパウロは「こういうわけで、アグリッパ王よ。私は、この天からの啓示にそむかず」と言います。パウロは 20 節にある通り、まずダマスコで宣教し、次にエルサレムにいる人々に、またユダヤの全地方に、さらに異邦人にまで、悔い改めの福音を宣べ伝えました。「そのために、ユダヤ人たちは私を宮の中で捕らえ、殺そうとしたのです」と彼は 20 節で言います。これはパウロが異邦人にも福音を宣べ伝えたからでしょう。ユダヤ人からすれば、これではユダヤ人であろうと異邦人であろうと何の違いもなくなり、自分たちの優越性が失われてしまいます。しかしパウロは今や分かりました。神の前にはユダヤ人も異邦人も同じ罪人です。どちらもただ恵みによって救って頂かなければならない者たちです。ユダヤ人はこれまで啓示の担

い手として選ばれましたが、そのことはユダヤ人の責任を重くするものであっても、彼らを高ぶらせるためのものではありません。今や福音は全世界に差し向けられ、人はただイエス・キリストへの信仰を通して罪赦され、御国の民となることができるのです。これは聖書が語って来たことであるとパウロは 22 節で言います。「預言者たちやモーセが、後に起こるはずだと語ったこと以外は何も話しませんでした。」と。そして聖書のポイントとして、キリストが苦しみを受けること、また死人の中から最初によみがえること、そしてこの民と異邦人に光を宣べ伝えること、と述べます（欄外 23 別訳）。こうしてパウロはイエス・キリストの福音は、モーセや預言者たちが語って来た約束の成就であること、イスラエルが待ち望んで来た希望の本体であることを示して、このキリストに信頼する神の祝福に生きるように！とアグリッパ王に迫ったのです。

この結果は次の箇所で見ることになります。今日考えたいことは、私はどうかということです。私はまだ暗やみの中にいるのか、それとも光に立ち返ったのか。たとえ私たちが何かに一生懸命取り組んで、私は正しい、私は良く見えていると思っても、実は霊的な暗やみの中にいるということはありません。罪の問題をそのままにしているならそうなのです。その人はサタンの支配の下にあるのです。罪はその人のあらゆる物の見方、考え方、その生活に影響を与え、覆いをかけています。そして今この時も神に全く反逆した歩みを積み重ねているということになりかねません。

しかしその罪の虜の状態、またサタンの支配から私たちを解き放つために、イエス様は十字架にかかってくださいました。あのイエス様の十字架は、私の救いのために神がしてくださったことだと信じ、イエス様を受け入れるなら、私たちは罪の赦しを得、神の光の中を歩む者とさせられるのです。そして神を知る光の中で、この世界をそれまでとは全く違った目で見える者になります。私たちの周りにはただそこにあるのではなく、神が目的を持って造り、そこに置いておられるものであることが分かって来ます。花一つを見ても、全く違った意味合いを持つものとして私たちの目に映るようになります。そして何よりも自分自身を新しい光の下で捕らえるようになります。またこの世界の将来についても確かな見通しを持つことができるようにされます。そして私の見方だけでなく、私を取り巻く環境が変わるのですから、神が私を確実に守ってくださる生活となります。Iヨハネ 5 章 18 節：「神から生まれた方が彼を守っていてくださるので、悪い者は彼に触れることができないのです。」そして永遠の御国へと確実に導かれることができる。私たちは自分の力で暗やみから光に移ることはできません。そのための力を与え、事を導くことができるのはイエス様だけです。私たちはイエス様の十字架と復活に私のすべての幸いを見だし、この方に信頼して従う歩みへ進みたいと思います。主はそうする者を暗やみから光に、サタンの支配から神の恵みの支配へと導き入れ、他の聖なる者とされた人々と共に、

必ず御国を受け継ぐ歩みへと導いてくださるのです。